



## ロゴマークで伝えられないものか、自然を護る小さな言葉

●  
加藤 和子  
(北広島市)

花を訪ねて林道に入る。近くにあつて例年行く場所だ。「今の季節ならば“あの場所”で“あの娘(花)”に会える」と思う。そろそろ根株も少しは増えた頃だろう。花の付きは増えただろうか。やってくる今年の虫のタイミングはどうだろう…などと楽しい期待で胸をはずませて足を運ぶ。途中に見られる様々な花もおなじみさんで可愛い。チラリと見たり、思わずじっくりと見たりして、幸福度100%といったところ。

ところが「あの娘(花)」が居ない。いる筈の場所に居ない。草刈りチェーンソーで薙ぎ払われた跡だけが残っている…。

草刈りをしたのは、その場所を管理している行政に委託された業者か、ボランティアの方だ。

その方たちに、この道沿いに咲く花を知っていて欲しいと注文するのは、無茶な話である。草刈りは年に1~2回のことだし、花の方はそれぞれの季節に合わせて次々と咲く。空隙地を狙う植物のエネルギーの凄さをご存知の通りで、林道をきれいに保っててもらえることを、有難いと思わなければならない。

けれどもと思うのである。

公園のかたすみに、棒きれ数本の小さな柵を見る事がある。そこには大抵きれいな花がある。踏みつけられたり刈られたりする花を惜しんで囲っているのだろう。花嫁の親に似た恨めしさと誇らしい気持ちが伝わってくる。特別に珍しい植物ではないかも知れない。だがこの辺りには少ないし、美しい花を咲かせるので大事にしたいのだ。しかし、囲むことで人に知られて盗られたらどうしよう。だが、知られない故に雑草として刈りとられ、だんだんとその数を減らしている。ウームと悩みながら枝を拾う“棒立て氏”の姿が見えるではないか。地方に住む自然愛好家は小なり小なり同じ

ような経験を持っていることだろう。

そこで提案したいのだが木の枝や棒の先に取り付けるエンブレムを協会で作れないだろうか。

「草刈り注意マーク」「踏みこみ禁止マーク」、さらに「野鳥営巣中マーク」や「スズメバチ注意」など、解りやすい図柄の自然との交通注意標識が公園の管理事務所などにあると、地域に住む自然愛好家が木の枝などに結んで簡単に使うことが出来る。

またこれらのロゴマークを用いることは自然を残す役割だけではなく、人々に自然の大切さや未知の自然を知るよろこびを広めてくれる役にも立つと思う。

実際に作るとなると経費や管理などと簡単には行かないだろうが、しかし、この問題は現実には個人では解決が出来ないので、ひとつの方法として提起をしました。